

落語家をやっていると、その^{はなし}のなかにお金
が絡む演目を多く発見します。まあ当たり前
って言っちゃ当たり前ですが。人が生きて行
くにはお金は必要ですから。

おそばを食べるのが十六文。一文カスツて
十五文でそばを食べようとする「時そば」。
家賃を払うの払わないのと、必ずその話題が
出る大家と店子。春の演目「長屋の花見」の
始まりは店子同士が家賃を払わないことを自
慢しあっているような会話が笑え。笑えない
ほど溜めちゃった大工の与太郎が商売道具の
道具箱を家賃のかたに持っていかれて、それ
が元で大工の棟梁と大家が大喧嘩になる「大
工調べ」。一分^{いちぶ}というお金を出して一枚の札
を買い、それで千両を当てようという今でい
う宝くじ。昔は富くじ。嘶には「宿屋の富」
「富久」「水屋の富」「御慶」など千両当たっ
たばなしに花が咲き。同じ千両でも人の病を
治す嘶に、この真夏に有りもしない蜜柑を食
べたいと床に付いちゃった若旦那。医者に見
せれば、その食べたい蜜柑を食べさせれば命
は助かると聞き、店の番頭が探してみれば、
一つ千両する蜜柑を発見！ 若旦那と番頭の
運命はいかに（!?）「千両みかん」。狸だっ
てお札に化けます「狸の札」。山の上からの
目掛けて小判を放る「愛宕山」。ケチな親父。
息子達のお金の使い方が気になる「片棒」。
そんなお金のことばかり言っていると泥棒だっ



絵・江口修平

粹なお金の使い方

柳家花緑

て出てきちゃう「出来心」「もぐら泥」「締
め込み」などなど泥棒嘶。ほしいと思えば
お金の夢だっって見ちゃう「夢金」。高尾に逢
いたい。アー逢いたい！ 高級遊女、高尾
大夫に逢いたければ、三年働いて十五両。
若い職人の恋の嘶が「紺屋高尾」。

そして人情嘶の名作が二席。「芝浜」に
「文七元結」。「芝浜」は芝の浜にて四十二両
入った革財布を拾ってくるところから嘶が
進み。「文七元結」は、娘を吉原へ売ったお
金五十両、それを橋の上から身投げをしよ
うという若者に上げてしまおうというお嘶。
どちらも大作ですが、私の祖父、故・五代
目柳家小さんは、「芝浜」より「文七元結」
のほうが好きだと言う。理由を聞けば「や
っぱりお金は拾うより上げるほうがいいな
っ」と一言。祖父の考えは江戸っ子の気質
そのものです。昔から「江戸っ子の生まれ
損ない金を貯め」という川柳や「宵越しの
銭は持たない」なんて言葉が残っている。
勿論ここにヤセ我慢もあり、本当はほし
いんだけど、その欲を見せるのは粋では
ないと皆で野暮を嫌った時代。

そんな時代の人の心を語った落語から一
つ学ぶことがあるとすれば、それは執着し
ないで他人^{ひと}が喜ぶ使い方をする人がお金と
上手に付き合う人だ、ということです。私
もそんな風に生きたいです。

やなぎや・かるく●落語家。1971年東
京生まれ。祖父であり、落語界初の人
間国宝、名人・柳家小さんに入門。
「芸は人なり」「萬事素直」との教えを
受け継ぐ。94年戦後最年少の22歳で真
打に昇進。著書に『花緑がナビする大
人の落語ことはじめ』など。

